

2022年度 敬愛大学 「教育社会学」 第12回 「生徒文化について」の学生のコメント、一部抜粋（課題提出48名中、28名掲載。匿名での公開に関しては、学生の了解を得ている）

1 私は高校時代女子高校に在籍していたが、生徒文化のタイプは概ね授業資料にあったようなタイプがあったように思う。だがヤンキーグループは無かった。他の女子高校の話を知るとそのようなグループも存在する様だが、全てに当てはまるものではないと考える。逆にオタッキーグループは2種類あった様に私は感じている（アイドルについてとアニメや漫画、声優についてなど）。生徒文化には生徒が学校で生活する中での自分の居場所を作っているのではないかと考える。

学校名を聞くと納得するという現象は私も感じたことがあるのだが、それは高校選びの段階で自分に合う学校を自然に選んでいたり、その学校の文化や校則に触れたりしていく中で個性の様なものが身に付いていくのではないかと考えた。

教師は生徒文化に振り回されて生徒への対応を大きく変えてしまうのは良くないが、全く無視してしまうと対立を生んでしまう可能性があると考え、生徒たちと関わりながらどの様に関わっていくべきなのかをしっかりと考え声かけや指導につなげていくことが大切だと考える。

2 生徒は友人の影響を大きく受けるというのは、私の実体験でもある。私の中学校では、真面目にやることがダサいという認識が大きかったように思う（中学生という葛藤のある時期のせいでもあるかもしれないが）。そのため、私の友人も不真面目に振る舞う人が多かった。私自身影響されやすいので、当初は真面目にやることが多かったのに、周囲の真面目はダサいという暗黙の認識に押されて、不真面目になっていた。なんとか自称進学校に在籍した高校生活では、正義感の強い親友ができ、その人にも大きく影響を受けた。中学生の頃不真面目だった私は、親友に影響を受けて真面目にやることがダサいという認識を改めさせられた。これを自覚したことで、自分がいかに周囲に流されやすい性格なのか分かった。

このように、周囲の空気感に流されやすいのが中学生の習性であると考えた。また、流されなければノリが悪いと認定され、ハブられることに繋がる。このような行動様式が生徒文化にはあると考える。

3 生徒文化とは生徒たちの独自のルール、潜在的カリキュラム、隠れたカリキュラムと呼ばれるのではないかと考える。そのように考える理由は、学生時代に、その場の他人の視線や雰囲気で行動をするということが多くなるからである。例えば逸脱型の特徴として、個人では教師に従順だが、集団やクラスの前だと反動的になるといったケースがあげられる。これは集団の雰囲気や集団内でのその生徒の立場がそのような行動につながっているのではないかと考える。そのため、集団の雰囲気や他人の目を気にしながらの生活があり、明確

化されていないルールが生じていると考える。

前述したように、周りの雰囲気の一つの原因としてあげられるのではないかと考える。「みんながやっているから」「私はこうじゃなきゃいけないから」と自分を縛ったり、みんなに合わせてたりする行動が増えることで生徒文化が生まれていると考える。

生徒文化には「遊び型」「逸脱型」「勉強型」「孤立型」の四つのタイプがある。それぞれに特徴があり、「遊び型」と「逸脱型」は互いに似ている意識を持っていることが資料から読み取れる。例えば「部活は楽しい」「学校の規則は多すぎる」といった意識を持つことが多い二つである。

生徒文化には「守る」という行為をすることで、学校という社会の中での自分の地位やアイデンティティを確立する働きがあるのではないかと考える。①でも挙げた「逸脱型」の生徒の例を見てもこのように感じる部分が多い。また潜在的カリキュラムの中に多くあるのは上級生と下級生の関わり方や身だしなみのルールが多いことがあげられ、守らないと叱られたり、無視されたり最悪の場合「いじめ」に発展することもある為、ルールを守り、自分の地位を確立していくための機能が大きいのではないかと考える。

教師は期待と許容範囲を意識して関わればよいと考える。その理由として、生徒文化とは生徒間で必然的に表れるものであり、それを全て停止したり、廃止したりすることは困難である。それに加え生徒文化は悪い影響だけでなく、社会で生きていく中で培う必要のあるものも同時に含んでいる。それを学ぶ場を奪うのは教師の役目ではないと考え、良い影響が起ることを期待し、同時に、やりすぎには注意しながら見守る意識が大切だと考え、期待と許容範囲を意識して関わると良いのではないかと考えた。

4 資料を読んで、生徒文化は子ども(生徒)の視野から広がり、勉強における文化やグループ、遊びにおける文化やグループに分かれると思う。

まず、勉強における文化やグループはグループワークをする時や教え合いの時に自然と集まるメンバーで同じレベルの子どもたち同士で組まれたり、頭のいい子どもが苦手な子どもに教えることのできるグループができたり時と場合によって変化する。しかしどの場合においても、勉強が苦手な子どものうち、勉強に対する熱意がなければ孤立型となってしまふ。次に、遊びの文化やグループは、おままごとをするグループ、絵を描くグループ、工作をするグループ、スポーツをするグループなどに分かれる。どの活動も好きな者同士が集まるグループである。自然とそのグループごとに休み時間や放課後、休日に集まって遊ぶことが多い。

しかし、私の小学生時代は同級生やその兄弟が10人くらい集まり、何人かは10人のうち1人の家の前の道路でバドミントンをし、残りは家の中でゲームをして途中で外組と中組のメンバーが入れ替わるような遊び方であった。いつも同じ人の家というわけでもなく、誰かの家でメンバーは変わらずであった。今思い返すと、性格が合う合わないでもグループや文化の違いは見られたのではないかと考えられる。

5 ①こども文化とは、子どもの集団でいるときの逸脱的行動やアメリカのスポーツの分野に打ち込んでしまうことや趣味活動などから分かる通り、言い換えると子供の自由な意思のことだと思いました。

②生徒文化はなぜ生じるのか？については、やはり、厳しいルールが定められていて、自分たちのやりたいことが制限されている環境が続くために、生じると思いました。そこには、反抗期なども関わってきて、自立を促す心の変化も生徒文化を生じさせる理由の一つとなっていると思います。

③生徒文化にはどのようなタイプがあるか？については、資料にもありますが、教師に集団で反発したりする反抗的なものや子どもどうしてスポーツをするときに感じる仲間と協力して勝利を目指す一体感などがあると考えます。

④生徒文化にはどのような働きがあるか？については、親などの立場に反抗することで、子どもが全体的に自立に向かい、相互作用して、広がっていき、たくさんすることに挑戦することができるようになると思いました。

⑤教師は生徒文化にどのように関わればいいのか？については、教師が子どもの心を理解し、見守り、サポートするという関わり方をすれば良いと思います。ズカズカとその領域に踏み込むのではなく、あくまでも補助をするという気持ちで臨むべきだと考えます。

6 生徒文化について、確かに、資料にあるように、高校では「勉強型」「遊び型」「逸脱型」「孤立型」に分かれていると感じる。このような生徒文化が生じるのは、同じような価値観や行動様式を持つ生徒が集まってコミュニティをつくるからであると考えます。例えば、「勉強型」であれば、良い大学に入りたいと考える生徒や、良い成績を取りたいと考える生徒が、情報共有をしたり、学び合いをしたりすることで生まれる。また、「逸脱型」であれば、教師に反抗する自分に価値を見出すような生徒に他の生徒が寄ってくることで生まれると考える。このように、近しい価値観や行動様式を持つ生徒の集合によっていくつかの生徒文化が生まれると考える。

このような生徒文化に、教師は深く介入すべきではないと考える。前述したように、生徒文化は、同質の生徒の集合によって生まれる。そのため、教師が「みんな仲良く」というような思想によって、異なる生徒文化を無理に融合させる等の介入を行うと、クラス内の人間関係に問題が生じてしまう場合があると考えます。確かに、学校において、いろいろな価値観の人と関わるということは、自身の視野を広げるためにも極めて重要なことであると考えます。しかし、教師が生徒文化に介入することで、所属するコミュニティが居心地のいい場所ではなくなってしまうたり、かえっていじめが発生してしまうため、教師は生徒文化には深く介入すべきではないと考える。

7 生徒文化とは、学校内において形成される生徒の集団に特有な行動形式や生徒間で共有される価値や目標などの総体である。また、子どもの遊びや行事などを通じて形成され

子ども独自の文化のことである。子どもたちは学校で一緒に過ごす時間が長く、そこでの相互作用を通して子ども独自の文化が生まれ、そこから影響を受ける。

教師は学校生活の中で日々変化する様々な文化に常に注目し、生徒同士の文化から学んでいくことも重要であると感じた。そしてこの文化によっていじめなどの問題が起きないようにするためにも教師は様々なところに気を配ることが大事だと感じた。

8 生徒文化に対して教師は基本的には手を出さず、生徒たちに任せるべきだと思う。生徒文化は生徒の自己表現の場でもあると思う。

生徒文化の中にはいくつかのグループが存在すると講義資料にはあるが、これは基本的には生徒が自分に合ったと思うグループに属していくと思う。その中で自分はこのような嗜好を持ちこのような考えがあるのだと表現しているのだと思う。だが最近スクールカーストという言葉があるようにグループに優劣がつき、上位のグループの与える影響力はすさまじい。これは行き過ぎればいじめの原因にもなる。これを避けるために今では無理をして別のグループに所属しようとする生徒もいる。こういった力の優劣がある生徒文化のグループが生まれないう、多少の教師の介入は必要かもしれない。

9 私の考える生徒文化とは、児童・生徒が教師という大人に邪魔されず、自由にできる環境を作るために作られる文化だ。この理由として、どの時代も学校という環境の中で教師は圧倒的な立場を有している。そのため多くのことが制限されてしまう。だからこそ、逃げ道や憩いの場として作られていくのだと思う。この文化の特徴として、一つに収まらないということだと思う。生徒のタイプや社会的な出来事（新型コロナウイルスなど）によって大きく変わってくる。この部分が面白い部分であり、その時代を象徴するものである気がする。ただ変わらないものとしてカースト制度などがある。これは生徒たちの中で自然と染み付いてしまっているものであり、変わらないものである。これらを総合的に考えたときに、教師が生徒文化に関わるることについて、過剰に関わることはしてはいけないと感じる。この理由として、教師が無理に関わることによって、生徒たちの環境が維持されず、均衡を崩してしまう可能性もある。悪い方向に走ってしまっている文化については、大人が止めるべきだがそれ以外の時は外から見しておくべきだを感じる。

10 ①生徒文化とは生徒たちの独自のルールや規範のことをいうだろう。②生徒文化は学校の校則やスポーツのルールのようにもともと決められているものではない。友人と過ごしていたり、上下関係がある中で生まれやすいものだと考える。特に部活動のようないろんな人の集まりで起こりやすいだろう。私は中学、高校の時にサッカー部に所属していた。その日に初めて会う人には挨拶をすること、コート整備は1年生または、1軍以外の人が行うこと、ボールの個数や道具の確認は1年生が行うことなど様々なルールを設けていた。これらを破ってしまうと、「調子乗っているやつ」「だらしのないやつ」「頼りないやつ」と思

われることが多かったがきちんと守っていれば、印象が良くなり、先生や先輩から声をかけられることが多くなり、チームになじみやすかった。③生徒文化には、何事にも取り組む「真面目型」、スポーツも勉強が出来て頼りがいのある「エリート型」、規則に捉われずに思いのままにいきたい「自由形」、自分が一番と考える「孤高型」、何事にもほどほどが一番「消極型」の5つがあると思う。私はおそらく「真面目型」に属していたと思う。私の学校では身だしなみや過ごし方にルールがいくつああって、男性はツーブロ禁止、女性は必ずリボンを胸元につける、休み時間以外携帯使用禁止、化粧禁止などがあり、それに不満を感じ反発しようとする友人が多くいた。④生徒文化があることで生徒会や委員会、部活動の中でまとまりが出来やすくなり、目標や規範に沿って自己理解に繋がっていきだろう。しかし、上手く馴染めなかったり、乗り遅れてしまったりする人は立ち直すのに多くの時間が必要だろう。自分だけが抱え込みすぎてしまうと不登校などにも繋がってしまうだろう。

⑤教師は生徒文化と真摯に対応していく姿勢が必要になるだろう。大人の考えを押し付けてしまっはその考えに固執してしまい、新しい試みをやろうと思わなくなるだろう。一人ひとりの生徒の機会を踏みにじることなく、その子にとって良い経験になるように出来る限りサポートしていくことが必要である。

1 1 ①生徒文化とは、生徒たちが自らつくっている暗黙のきまりのようなもの。(生徒たちの独自のルールや規範) 学校の校則のようにはっきり明文化されたものではなく、不合理なものも多い。友だち関係のなかにも暗黙のルールがあり、そのルールに疎いものやそれを破ったものは「むかつく」存在として仲間はずれにされたり、いじめられたりする。②生徒文化はなぜ生じるのか。生徒たちが学校で同世代と集団生活を営む以上必然的に生ずるものだからである。高校生のなかの「遊び下位文化」や「非行下位文化」が発見され、学校や教師とは別の価値規範が生徒たちのなかに広がっているから。③生徒文化にはどのようなもの(タイプ)があるか 「遊び型」「逸脱型」「勉強型」「孤立型」。④生徒文化にはどのような機能(はたらき)があるか。生徒たちの交友の場・個性発見の場・エネルギー発散の場であり、生徒の自律性形成にとって有益であるが、スポーツや遊びばかりでは一人前の社会人にはなれない。(遊び下位文化) 社会や学校のあり方が反映している。(非行下位文化)。⑤教師は生徒文化にどのようにかかわればいいのか。学校や教師は真摯に対応していく必要があり、学校という場を相対化し、そのとらわれから抜け出す必要がある。生徒たちは置かれた学校文化の特質に大きく左右されながら、自分たちなりの戦略を持ち、学校生活を送っている。そのため、生徒たちの主体的な選択に注目し、さまざまな生徒の意見を聞く必要がある。

1 2 私は生徒文化の意味がきちんとこれだと確信はありませんが自分の考えから教師が生徒文化にどのように関わっていけばいいのかについて述べようと思います。生徒文化は生徒集団の特有な行動(ルール?)や人間関係を通して特異な文化を受け、影響を互いに与

えているものだと思います。

先生の資料から教員は「大人の文化を生徒に押しつけようとするのに対して、生徒は子ども集団に特有な文化の代表者としてこれに対抗するのである」という言葉やもう一つの資料の方に「大人と子供の意向はいつの時代も対立する」という言葉などから教師はどのように向き合うべきか考えてみて、まずは新しい時代を受け入れる気持ちを持つことが大切だと思います。私自身も自分の親（昭和の考え）がそれは違うと強く否定することもあれば親が否定することもあります。学校なら今でいうと校則の問題も生徒文化の中に含まれていく問題なのではないのでしょうか。私たち（生徒、児童）ならではの校則に対する考えと教師たちなりの子供の時から受けている教育（洗脳？）はお互いがこれが正しいと強く思っているからすれ違ってしまおうと思いました。両サイドの考えを聞いた時に正直、人によってはそれぞれ両方の考えも浅はかだったりします。

私は生徒文化を全て受け入れる必要はありませんが否定ばかりも違うと思います。きっと、私が教師になれたとして新しい時代の生徒たちから今の時代じゃありえない考えや世間からあまり良いとされていないことを肯定してくれと言われたりする時がくるかもしれません。その時は生徒を子供としてみるのではなく1人の人間としてしっかり話し合っただけで私が少しでも納得できたら私の考えと生徒の考えを取り入れた新しい案を考える（寄り添えられる）ようにしたいと思います。私は下手したら親よりも教師という立場が一番生徒を子供としてみてしまい意見をしっかり聞き入れようとしない、否定ばかりしている気がします。私の長所は新しいことに挑戦することですしやると決めた時は周りの風潮や固定概念などは気にせず動くタイプなので生徒文化と教師たちの考えがすれ違った時、少しでも共感し合えるように出来たらいいなと思います。

13 ①② 生徒文化は、授業資料（12-1.1）にある中でも特に現在の学校では、学校外で得た知識や感覚を学校の生徒たちの実態に合わせて、変化しながら生ずるものだと思う。具体的には家庭や塾など生徒自身に直接関係するものやTVやネットなどの流行りからなどから変化する。それは、各学校独自の流行りがあり、暗黙のルールや雰囲気を持つものであると考えられる。中学生対象の塾で講師をしているが、生徒たちはYouTubeやティックトック、ゲームなどの流行りはみんなが知っていて当然で（前提知識としてあり）それを日常生活と結び付けたり、物真似やネタをしてみんなで楽しんでいる様子がよく見られる。前提知識として知らない話題についていけないので、学校生活以外の共通認識（無意識の同調圧力によるものかもしれない）がこのような生徒文化を作り上げる原因になっているのではないと思う。③ 私は、授業資料にある生徒文化以外に、学校全体が疑似社会のような生徒文化があると思う。生徒から見た学校の社会（会社）的構造に分類すると、以下のようになる。教師は、規則で縛ったり、指導をしたり、内申点をつける立場であり、（生徒たちは）逆らえないので、社長のような存在。3年生は学校に対する慣れや最上級学年であることの誇りがあったり、（時には）偉ぶったり、大人・先輩ぶったり（1, 2年生は逆らえな

い) などがある。反面、先生には逆らえないので、役職ある上司のような存在。

2年生は学校に慣れていて、3年生には逆らえないが、1年生よりは偉い（立場が上）だという意識があるため、平社員のような存在。

1年生は学校に慣れておらず、先輩たちに逆らえないため、新入社員のよう存在。

また、これ以外にも学級の中で（授業資料にもあったような）一軍、二軍、それ以外というヒエラルキーがあったりする。これらのようなヒエラルキーを独自に作り上げている。授業や規則で先生や先輩が偉いと教え込まれたわけではないが、誰もが先生や先輩は偉いものだと感じていて、伝統や年長者を敬うことが自然に行われている。これは生徒たちが無意識に小さな社会を学校の中で作り上げているからなのではないか、と考察した。

他に、周りの目を気にすることは生徒文化の一つであると思う。皆より頭や運動神経がよかったら、皆と違う自分がかっこいい（反抗的な面も含めて）、皆にハブられたくない、皆と同じ自分がいいというような「皆」が基準になっていて、比較する思考や行動は学校の中だけで見られるものだと思う。バイト先の職場、ボランティア先の職員室、通勤中などの大人の行動をみても、「皆」を気にしている姿は見られない。子どもにとって自分の存在価値を感じる大部分である学校で、ずっと同じ人たちと過ごす生徒たちは「皆」を意識せずには生活できないのだろうと思う。学校以外の自分の居場所が作りにくかったり、自分の存在感を実感しにくかったりなどの原因があり、狭いコミュニティで自分が関係する場が完結してしまっている。これ故に、学校は無意識に「皆」が基準の文化ができあがっていると思う。

14 資料を読んで、国問わずどこの学校にも同じような文化、傾向があるのだと思い不思議に思った。誰1人同じ人はいないのに、どこも全く同じ学校はないのに、なぜだろうという疑問がうまれた。

2.2 子どもの逸脱的行動で、「学校の規範から逸脱したり反抗したりする行動をとることにより、その集団内での地位は保持される。」とあるが、子どもは学校での集団の中で地位を気にしている傾向があるのではないかと思った。そしてこの地位は学校生活をどのように過ごしていくかがある程度決まっているのではないかと思う。結果どの学校でも同じような地位関係が形成され、同じような生徒文化が生まれるのではないかと思う。

教師の生徒文化への関わり方として、その時その時の文化があるため、自分の意思を押し通すのではなく、流れに沿って関わっていく必要があると思った。なので教師には柔軟な対応力、適応力が必須だと思う。

15 私は、この講義を受ける前までは生徒文化というものを聞いたことがない用語でした。ただ今回の講義で多少なりとも生徒文化というものを理解できたのではないかと思った。そもそも生徒文化というものはどのようなものか資料を見て改めて考えてみる。生徒文化というのは、生徒自身が独自のルールや規範を作ることだとある。要するに、生徒が教師にルールや規範を決められて物事を進めていくのではなく、自らの考えを持って物事を取り

組むものではないかと思う。その生徒文化には、「遊び下位文化」や「非行下位文化」が発見されている。そのことは、生徒は学校や教師とは異なる価値規範が広がっていることがわかる。先程の文にも出てきた二つの生徒文化を大まかに資料を用いて説明を行うことにする。初めに、「遊び下位文化」は生徒自身の交友の場、個性発見の場、エネルギー発見の場であり、生徒の自律性形成をする有益な場であるだろう。しかし、スポーツや遊びだけでは必要な知識技術が習得できずに一人前の社会人になれないという。「非行下位文化」の形成においては、社会や学校の在り方でできている。例としては、傷つけられた自尊心を守るために仲間と連帯して学校的価値に反発を表明しているという。

このことから「生徒文化」は、私が考えるに教師が学校の中で生徒とどのようにして接していくことが重要になるのではないかと考える。どうしても、生徒だけでは様々な悩み事を抱え込むことが多いと思う。そのことを生徒自身だけで解決することは難しいものだろう。そのために、学校の間という生徒と教師が身近な関わる場所で解決していくのが大切だ。教師は、いち早く生徒の様子を日々の生活から注意深く見ていくようにする。また、生徒は悩みを抱える前に、相談できる教師を自ら考えるようにして何かあったら相談できるように準備していくようにすると良いだろう。このような細かい視点を持つことで生徒文化というものはより深まったものになると言えると思う。

16 生徒文化とは学校が正規に決めたルールとは別に、生徒たちが独自に作ったルールや規範のことを言う。生徒文化がなぜ生じてしまうのか考えた時に、学校という場は生徒が主人公であることを非常に象徴しているのではないかと考える。自分の経験からしても、学校や教師が作った規則よりも生徒が勝手に作ったルールの方が生活により強く影響していたと感じるが、それは学校や教師が作った規則は子どもに寄り添ったものではなく、ある意味部外者が作ったものという印象があったからであると感じる。そう考えると、生徒たちが自身で作ったルールを守ることは当然のことであり、教師は学校の主人公が生徒であることを理解するためにも生徒文化をしっかりと知るべきであると感じる。しかし、生徒文化の中には非常に理不尽な規則もあるため、暗黙の規則に苦しむ子どもたちに手を差し伸べることが教師には大切な働き掛けだと思った。

17 私は偏差値 58 の規則も学力も平均的な高校に通っていました。私の学校の「勉強型」「孤立型」の生徒は、規則に対して違和感をいだいたとしても、「進学のため」もしくは「自分が目立たないようにするため」に規則を守れる性質を持っていました。また、「勉強するために学校に来ている」という気持ちが強いので、そもそも規則をそこまで嫌だと感じていない可能性もあったと思います。(化粧やスカート丈を短くするなど、勉強するための学校生活に不要だと考えている。)
「遊び型」の生徒は、時々規則を破ることもありましたが、基本的に学校生活を楽しんでいましたし、決められた範囲内で楽しむことができていました。(化粧やスカート丈を短くしたいけど、怒られてまでやる必要はないと考えている。)反

対に、「逸脱型」の生徒は学校の規則を軽く見ていて、学校に行く理由が「勉強」である場合はあまりなかったと思います。大体の生徒が「友達に会いたい」とか「恋愛をしたい」「行事を楽しみたい」という理由だったと思います。(遊び型もそんな理由だと考えます。)このような生徒たちは「青春したい」とよく言います。「青春」とは、部活を全力でやり、恋人を作って、友達とも楽しく過ごし、行事も楽しむということだと考えています。「青春」するためには、周りによく見せたいし、少しキャラつきたいという気持ちが出て、規則が邪魔になるため、破っていたのかなと思います。大学生になり2年経ちますが、今大学で関わっている子たちは、わりと明確に〇〇型だったのだろうと予想できますし、逆に高校時代の友達は、SNSなどをみて、〇〇型を受け継いでいるなど感じます。中高生で所属(?)していた型は、ある程度成長してもそのままであることが多いのかな?と感じました。

18 生徒文化とは配布プリントその13にもあったように、生徒たちの独自のルールである。このプリントを読み感じたのはなぜ生徒文化は生じるのかだ。日本の伝統的な礼儀作法などが先生から上級生、上級生から下級生へと流れるように求められることが原因だと感じた。どの学校でも必ずある「上級生に会ったら挨拶する」は求められてはいるがどこにも明記されていない暗黙の決まりで上級生が卒業したとしてもまた次に上級生になったものがそれを引き継ぎ生徒文化が廃れないのが生じる原因なのではないかと感じた。

また、明記しないが「シャツのボタンを外さない」や「スカートを短くしない」というものは学校側の強要はしないが、生徒に求めているものだと感じる。学校内外の風紀を守る為に求めているが、校則に明記すると生徒の自由を縛ってしまい、反学校的感情を抱く生徒が多くなるから暗黙の決まりになっているのだろうと考えた。

これらは消えることの無い暗黙の決まりだが、この暗黙の決まりをもう少し緩和する方法を考えていかなければ、生徒内での問題が起き続けるのではないかと感じる。

19 生徒文化とは、学校内で形成されるもの。生徒間で生じる行動や価値観のこと。生徒間で生じて学校内でなければ生徒文化にはならない。例えば習い事、塾やスポーツクラブなどは学校外でのコミュニティになるので、例外になる。また、これを個人の趣味でやる場合も含まれない。

個人で好きな物や趣味など熱中するものがあり、それを学校に持ち込んで生徒間で話して作られるコミュニティがよくあると思う。これは好きな物に対しての価値観が一緒に作られるものなので、生徒文化と呼ばれる。これは新しい友達が増えたり、色々な考えを取り入れられるようになるいい効果を持っていると思う。その反面、無理をして生徒文化に入っている子がいるのでは無いかと考えます。それが無いとコミュニティがなくなる、もしくはいじめにあってしまうかもしれないという問題もあるのではないかと感じます。

20 ①私は生徒文化（子ども文化）とは、生徒（子ども）だけに適応され、一部の生徒（子ども）に都合の良いものであると考えます。また大人（教師）は認知できても介入が難しく無くすることはできないものでもあると考えます。まずクラス内カーストのようにカーストの上にいる人はその生徒文化においては何をしても良いといったその文化の中でだけ通用するものが多いです。次に配布資料にもあったように、アンケートの結果から4つの生活文化があり、それぞれでルールが違ったり干渉しあっていたりする場合があります。文化といってもいじめのようなものもあれば、住み分けといったものなど多くの種類があると思います。教師の中にはクラスの雰囲気だと捉える人もいれば、文化を失くそうとする人などと教師によって対応が変化するのではないかと考えます。後者の場合で生徒文化をなくすことができてもすぐに新たなものができたり、教師が失くしたとだけ思っているだけで教師の見えないところで文化が残っていたりするのではないのでしょうか。このようなことから大人（教師）が認知することはできても文化を変化、無くすことは難しいもので生徒（子ども）だけに適応されるものであると考えます。

②生徒文化が生じる理由として私は、生徒（子ども）が学校生活を安全に楽しくするためや優越感が欲しいがために生じるのではないかと考えます。学校生活を安全に楽しくするために生徒（子ども）にとって都合の良いものが生徒文化となっていると思いました。配布資料13にある暗黙の決まりが優越感に繋がると 생각합니다。最初は窮屈な思いをして、学年が上がる今度は決まりを強いることができるためそのループが出来上がります。

③生徒文化には身分制度のようなものと独自のルールがあると思います。身分制度はそのままでカーストの上位～下位に分かれその位置によってできることやクラスでの立場が決まりその位置は変化することがあるというものに近いものだと考えます。独自のルールでは、そのルールはブームのようなものでずっとあるものではなく流行のように無くなったり、無くならなかったりするものです。

④生徒文化には生徒（児童）の精神面に大きく作用する機能があると考えます。配布資料14の表1を見るとどの類型をみても感情に関するものが多いです。大きく分けると現状に満足している人もいれば現状に不満を持っている人に分けられると思います。原因として今いる環境（生徒文化）が挙げられます。中には学校の制度や教師が原因によるものもありますが、多くはその文化（生徒文化）が自分自身に合っているかそうでないかによって楽しいや悲しいといった感情が表れています。

⑤教師は生徒文化に適度に関わるのが良いと思います。ここでいう適度とは、どのような文化があるかを知ってはいるが学校生活や学業に支障が出てきそうな場合は介入するということです。私はみんな仲よくしようというのは無理だと思うので、学校生活や学業に問題がないのであれば様子見で良いのかなと思います。放置というわけではなく観察しつつたまに関わるといったもので良いのではないかと考えます。

2 1 生徒一人一人には違った個性や特徴がある。得意なことも、苦手なことも、好きなことも、家庭環境も異なる。そうした中で生徒たちは、友達やクラスメイトと関わりながら、自分と共通の趣味がある人や、一緒にいて楽しい人、価値観が合う人などと、自然に付き合うようになる。もちろん、1人である方が楽な人もいる。このように、無意識に生徒同士で、一緒にいる人がグループとして成り立ち、そのグループにしかわからない雰囲気やノリ、いわゆる「文化」が生まれるのだと考える。私は、高校生の時にそのグループにしかわからない雰囲気を感じたことがある。席替えをして、仲の良い女子グループが近くになった。私はあまり仲良くはなかったが、授業などのグループ活動は一緒に行った。そこでは、その人たちにしかわからない雰囲気や、ノリがありついていけないこともあった。そのグループの人達からしたら悪気はなく、文化として自覚はしていないはずだ。しかし周りから見れば、その人たちの文化が生まれている。生徒文化とは、このように無意識に生まれてしまうものなのだと考える。

2 2 ① 生徒文化とはなにか-生徒文化とは学校内において形成される生徒集団に特有な行動様式や、生徒間で共有される価値・規範・目標の総体のこと。生徒文化は生徒をある特定の方向に社会化する機能をもつと同時に、生徒の学校生活への構えを通して学校での達成度にも影響を与えることがある。また、生徒文化はその時々々の流行や生徒たちの考え方を反映するため普遍的なものではなく、生徒一人一人に与える影響力はとても大きい。

② 生徒文化はなぜ生じるのか- 自分の居場所を確立するためだと考える。学校という一つの社会の中で自分らしく生きていくためには、自分が本来持つ力を発揮することのできる居心地の良い居場所が必要だ。そのために趣味や好きなもの、自分の性格など、コミュニケーションを通して共有しあうことで同じ性質を持つもの同士の生徒文化が生じると考える。自分と同じような性質を持つ者同士が集まると、話の馬が合うことや楽しさが生まれ学校へ通うための活力にもなるだろう。だから生徒文化は自分自身の居場所を確立するために生じると考える。

2 3 ①学校内で自然と形成される生徒集団においてそれぞれの生徒特異の行動様式や価値観、サブカルチャーなどの総体である。

②生徒文化が生じる原因は、自分が経験していない体験を生徒同士で共有することで、自分と比較し何が違うのか考えることで生じると考える。

③生徒文化のタイプはクラスの中心的存在で明るい性格の子達のグループの集まりである「陽キャ」と大人しめの性格の「陰キャ」が現代の生徒たちはこのようなタイプで分けられる。陽キャ・陰キャテストがインターネット上に存在しており、その結果から生徒は自分はこのタイプなんだと可能性を信じず思ってしまう。

④生徒文化は生徒をある特定の方向に社会化する機能を持つと同時に、生徒の学校生活への構えを通して学校への達成度にも影響を与える。

⑤生徒文化の現代的特質に基づいて教師は適合や巻き込み、生徒に内在化されている意識の活用などを行い秩序を維持したり、葛藤や対立を防いだりするといったことを行った。

24 アメリカの高校で人気のある生徒は、男子だと運動できる人、女子は明るい子とあるが、日本でも同じようなことが言えると思う。私の学校でも、スポーツ大会などで活躍した人が、次の日からスターかのようにみんなから親しまれ、人気者となっている姿を何度か見たことがある。また、実際に学校にも勉強にしっかり取り組み真面目なグループ、校則や先生の言うことを聞かない不真面目なグループ、アニメや漫画好きが集まるオタクグループなど、同じクラス内でもいくつかのグループに分けられることは今の学校にもある。私も経験したし、男子にはあるのか分からないが、女子は基本グループが固定されており、別のグループに少しおしゃべりをしていただけても、その小さなことが原因となりトラブルに繋がることがよくある。そのため、自分がいるグループの立ち位置などをとても気にして、全然興味がないことでも、興味があると言ってみたり、とても好きだけど、べつにあんまり興味ないといったりと、とにかく周りに合わせ、自分の居場所を守ることはとてもある。そこに関しては、私も女子だが、とても面倒だと考えており、大人になってもこういうものはどこかに存在し、すこし大変だなと感じた。また、いくつか分類されたグループはスクールカーストかのように優劣を自然とつけられていたように感じる。それぞれ好みや価値観が合ったもの同士が集まることは不思議なことではないが、勉強している人は真面目、真面目な人はつまらない、あまり喋らない人はつまらない、などの偏見は根強くあるなど私は感じている。学校という場所のほとんどは友達と過ごしている。その中には静かに学生生活を送りたい人、目立ちたい人、みんなと友達になりたいという活発的な人など、様々な人がいて、みんなの考え方や価値観が違うからグループというものが存在し、さらに生徒文化が生まれてしまうのかなと考えた。

25 ① 生徒文化とは生徒たちが独自で作っている暗黙のきまりだと私は考える。私の経験でいうと「リボンを解体しない」「靴下はくるぶしよりも長いもの」「ワイシャツの第一ボタンは空けてはいけない、スカートはひざ丈より下」「ジャージのチャックは完全に閉める」「髪の毛を結ぶときは耳より下で結ぶ、お団子は禁止」といったきまりがあった。このような生徒独自の文化を破ると学校の校則を破ることよりも恐ろしかった。生徒間で暗黙のルールを支配していることを生徒文化だと考えた。

② 部活動やクラス内での認識された人気に基づく上下関係が生徒文化を生じてしまうきっかけになると私は考える。部活での暗黙のルールでそれに疎く破ってしまった場合先輩から呼び出され制裁され、友達関係の中にもNGワードを言ってしまったり暗黙のルールを破ってしまうと「むかつく」「鬱陶しい」存在としてはぶられてしまったりイジメに発展したりしてしまう。

③ 生徒文化には「遊び型」「逸脱型」「勉強型」「孤立型」の四つがある。

④ 生徒文化のように生徒の制裁はいじめが起りやすい傾向にある。教師の権力が強い学校(教師の指導方針)、校則違反に対する教師の体罰が存在する学校(学校文化)が生徒同士の文化(生徒文化)=暗黙のルールに反映していると考えた。

⑤ 私は教師に生徒文化と関わるうえであまり深入りせず見守ってほしい。例として先輩とのいざこざで自分にとっては大したことがないからほっといてほしいのに先生が良かれと思って勝手に間に入ることで先輩との間に亀裂がいつらくなってしまうといったことが実際にあったので周りから見ていて見ていられなくなったら対応してほしいと私は思う。もしくは先に私に先輩に一言かけようかの確認をとってほしかったと感ずることがあったので教師は生徒も様子を見ながら対応することが大事だと思います。

26 私はこの授業資料を読んで、教師は生徒文化に関わっていけばよいのかを深く考えました。生徒文化について考えた時、私の中学、高校の時代にもあったなと思いました。私の学科は英語科で、比較的女の子が多いクラスだったのですが、クラスの仲良しグループでも、当時は気にしていませんでしたが、今思うと、いわゆる「陽キャグループ」「一般グループ」「オタク系グループ」「静かグループ」と分かれていたなと思いました。この分類されたグループを無理に一緒にさせる必要は無いと思いますし、生徒たちも自分の好きな所に所属していると思うので悪い事だとは思いませんが、学級カーストに繋がってしまったりするので、行事などではグループをなるべくばらしてみんなで協力させるなど、関わりの方を教師が生徒に提供することが大切だと思います。また、高校名を聞いたり、制服を見て、「あ、〇〇高校だからギャル、ヤンキーだ。」などと思うこともありました。これは、偏見ですがその高校の生徒たちや校風から、自然にイメージができてしまっているのだと思います。

27 教師は生徒文化にあまり口出しをせず、自由にさせた方がいいと私は考える。生徒文化の中で学べることもたくさんあると思うので、教師が口出しばかりをしてしまうとその学びも減ってしまうしなにより子どもたち自身が楽しくなくなってしまうと思う。子どもたちはそれぞれ個性があり、生徒文化の中にもグループがあつたりと教師は知らないことも多々ある。その文化に全て口出しをしてしまうと生徒文化とは言えず、学校のルールや規則として成り立ってしまうと思う。なので、教師は口出しをあまりせず、適度な関係でいることが大切だと考える。けれど、何も口出しをしないということは違うと思う。子どもたちに興味を持ち、ある程度のコミュニケーションを教師はとるということをしなければその中でいじめが起きてしまっても気づくことができなかつたり、本当にしてはいけないことでも注意することができなくなってしまう。そうすると、生徒文化は悪い方向に行ってしまう、全体としても良くない方向に向かってしまう。なので、教師は子どもたちに興味を持ち、本当に悪いことだけを注意するという関わり方をして行った方が生徒文化を成り立たせ、とてもよい状態で子どもたちも生徒文化に接することができると思う。

28 今敬愛大学ではタバコグループがあると思う。具体的には授業の合間や昼休みの時間などに複数人のグループがタバコを吸いに行っている。初めは仲良くなかった人たちも喫煙所でタバコを一緒に吸っていると段々と仲が良くなるようで授業終わりなどに「タバコ行かない？」などといった声をよく耳にする。この生徒文化の働きとして一日に数回タバコを吸いに行くため単純に彼らの間では会話が増え、また信頼関係が増していくようだ。このようにタバコには自然と仲良くなるきっかけが生まれやすいものであり、メリットも多いものであると思う。しかし、私がタバコグループを人たちを俯瞰して思うに彼らはあまり勉強熱心な生徒が少ないと思う。授業前にタバコを吸いに行くため、授業に遅れて入ってきたり、途中で抜けてタバコを吸いに行ったり、1人がそのような行動をとるとつられて真似して行動する人が多い。タバコを吸っていない頃は真面目に授業に参加していたのに、タバコを吸ってから不真面目になったね。という声もよく耳にする。このように生徒文化、生徒のグループというものは良い方向に進むものだけではなく悪い方向へ進んでしまうものもあるのだと感じた。